

2015/6/14

デービッド・オルフォード師

「生ける水の源」

聖書箇所：「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。」（ヨハネ 7：37）

ヨハネ 7：37-43

7:37 さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。 7:38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」 7:39 これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったため、御霊はまだ注がれていなかったからである。 7:40 このことばを聞いて、群衆のうちのある者は、「あの方は、確かにあの預言者なのだ」と言い、 7:41 またある者は、「この方はキリストだ」と言った。またある者は言った。「まさか、キリストはガリラヤからは出ないだろう。 7:42 キリストはダビデの子孫から、またダビデがいたベツレヘムの村から出る、と聖書が言っているではないか。」 7:43 そこで、群衆の間にイエスのことで分裂が起こった。

導入

のどの渇きは人間の基本的欲求です。ここにいる皆さんも、のどの渇きを感じたことがあるでしょう。のどがカラカラに渇いて、必死に水を求めたことのある人もいるのでしょうか。世界中で、安全な飲料水の確保に努める人を私はたたえます。今日の聖書箇所、イエスはこの渇きを例にとり、ご自身が豊かないのちをもたらす水の源であることを教えてくださいました。このような主の招きは、ヨハネの福音書にのみ見られる特徴です。ヨハネの福音書の目的は、読む人々が「イエスが神の子キリストであることを・・・信じるため、また、・・・信じて、イエスの御名によっていのちを得るため」（ヨハネ 20：31）だからです。

1. **イエスが発言されたタイミング。**（「さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。」ヨハネ 7：37a）

それは仮庵の祭りの最終日でした。この祭りは、ユダヤ人の先祖が荒野でさまよった時代に、神が民の面倒を見てくださったことを覚えて祝う非常に重要な儀式でした。ヨハネの福音書の注解書を書いた神学者メルル・テニイは、祭りの中で祭司が水を汲む儀式は、旧約聖書の中でもおもにイザヤ書 12：3 と関連があると言います。イエスは、仮庵の祭りのクライマックスを迎える最終日に、立ちあがって叫ばれました。イエスの言葉とこの祭礼との間に直接的な関連があってもなくても、イエスが大声で発言されたことで、儀式の中断が余儀なくされたことは確かです。イエスはみんなに聞こえるように発言されました。その内容は、他にはない招きです。祭りが最高潮を迎えたときに、イエスは人々をご自身のもとへ招かれたのですから、この招きの言葉がそれほど重要だったことがわかります。

私たちの主イエス・キリスト、神の御子は、この世に来られました。それは、啓示と贖いをもたらすためです。残念ながら、主の声を未だ聞いていない人が数多くいます。福音がまだ届けられていないという場合もありますが、日常に追われて主の声が聞こえないという場合もあります。祭礼の途中でも、忙しい日常生活の中でも、主が割って入られるまで、主の声が聞こえないことがあります。今日のみことばにあるイエスの発言は、人々の想定外の出来事でした。イエスは、その日の行事を中断させてでも話す必要があるとお考えになったのです。

私たちも、神によって足を止められる必要があるかもしれません。主はときとして、考えられないような方法を用いて私たちの注意をご自身に向かわせられます。神のおっしゃることばが大切であることを私たちに理解させるためです。

(例：スティーブン・オルフォード師のバイク事故が病気を引き起こし、それがきっかけで師はすべてを主に明け渡しました。)

このように中断させられたことは、実際にはすばらしい招きでした。

2. **イエスの招きの言葉。**（「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」ヨハネ 7：37-38）

なんとすばらしい招きでしょう。イエスは、絶えず豊かに霊の渇きを癒そうとおっしゃいます。（例：私はアメリカの中南部にあるテネシー州メンフィスに住んでいます。メンフィスには、膨大な水量を湛える珍しい水源があります。西の市境にあるミシシッピ川ではありません。ミシシッピ川は水路の役割を果たしますが、水源はこのミシシッピ川ではありません。地中に巨大な滞水層があって、そこから清潔な水がじゅうぶんに供給されるのです。しかし、この水源から新鮮な水を得るには、地下深くまで地面を掘らなければなりません。）

イエスは、ご自身が生ける水を豊かに与える源だとおっしゃいます。確実に枯渇しない水源です。けれども、この水をいただくためには、イエスのもとに行く必要があります。

「だれでも」とありますから、この招きに制限はありませんが、ある特定のタイプの人たちを暗に指しています。それは、深い霊の飢え渇きを感じる人です。イエスはそのような人をご自身のもとに招かれます。イエスを必要だと感じる人をご自身のもとへ呼び寄せられます。霊の渇きのない人もいれば、それに気づかない人もいます。多くの人は、別の方法で渇きを癒そうとします。

(例：預言者エレミヤは、イスラエルの民に向かって神のみことばをこう伝えました。「わたしの民は二つの悪を行った。湧き水の泉であるわたしを捨てて、多くの水ためを、水をためることのできない、こわれた水ためを、自分たちのために掘ったのだ。」(エレミヤ 2：13) 神は、ご自身の民にとっていのちの源であります。そうでありたいと願ってください。しかし、神の民は神に頼らず、いのちを与える神の備えを当てにせず、

主を拒んで、他のものを頼みとしました。水溜めは、そこに降った雨だけを溜めておけるものです。それでは水源として不十分です。さらに、ここに描かれているのは水を溜めておくことのできない壊れた水溜めです。神の民が頼りにしようとしたものは、生きるのに必要な水を与えてはくれませんでした。

これは、現代の多くの人の姿ではありませんか。永遠の命を求める飢え渴きをあらゆる方法で満たそうとしますが、その渴きは結局癒されません。宗教行事や儀式、楽しいことや嬉しいことに癒しを求める人がいます。忙しくすることで渴きを紛らし、自分の中に空しさや飢え渴きがあることを認めようとしない人もいます。恋愛関係によって満たされようとする人もいますが、頼れる人を求めても、その相手も実は渴いていたことに気づかされるだけです。

イエスは、ご自身が水源だとおっしゃいます。命の源です。つまり、イエスが霊の飢え渴きを癒してくださるということです。ただし、イエスのもとに来て飲まなければなりません。イエスを信じて、自分の人生に迎え入れなければならないのです。（イエスを受け入れる人は神の子となれる、とヨハネは語りました。ヨハネ：12-13）

イエスは、その場で行われている儀式とご自身の招きを結び付けられました。同時に、みことばとも関連付けておられます。旧約聖書のみことばは、神がご自身の民を祝福される未来を指し示します。「心」つまり内面が重視されていますが、イエスがひとりひとりの霊を満たしてくださることを示します。ここに描かれているいのちを与える水は、とりあえず間に合う分ではなく、豊かにあふれる様子です。

なんとすばらしい招きでしょう。本当の意味でこのように人を招くことができるのは、たったひとりのお方です。それは、イスラエルのメシヤ、神の御子、父なる神から遣わされたお方です。このお方は、旧約聖書のみことばの約束と希望を成就するために、そして新しい契約を与えるために来られました。

ヨハネの福音書は、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストに並ぶものではなく、イエスがすべての答えであられることを教えてくれます。イエスは、神を人間に示すために来られた神の御子、神のみことばそのものであられます（ヨハネ 1：1-18）。このお方は、弱った者をご自身のもとに招き、憩わせてくださいます（マタイ 11：28-30）。

イエスは、「いのちのパン」であられ、霊の食物を与えてくださいます。（ヨハネ 6：35）

イエスは、暗闇を消し去る世の光です。（ヨハネ 8：12）

イエスは、羊の世話をし、羊のために命をささげる良い牧者です。（ヨハネ 10：11）

イエスは、父なる神に通じる道です。イエスこそ、道であり、真理であり、いのちです。このお方を通してでなければ、誰も父なる神のもとに行くことはできません。（ヨハネ 14：6）

イエスがぶどうの木で、弟子たちは枝です。イエスに属する人々の中にイエスのいのちが流れ、こうして信徒は実を結ぶことができます。（ヨハネ 15：1-17）

イエスは悩みを抱えるある女性に出会い、決して渴くことのない水があり、それを飲むと「永遠のいのちへの水がわき出」る泉となるとおっしゃいました。（ヨハネ 4：14）。これは、ヨハネ 7 章に登場する仮庵の祭りの最終日のイエスの招きに通じます。

しかし、私たちはここからまだ深く掘り下げなければなりません。実際、著者であるヨハネがそうしています。この日イエスは人々をご自身のもとへ招かれましたが、そのとき、人々がイエスのおっしゃった内容をはっきり理解していなかったことが福音書からわかります。ここで考えなければなりません。

3. **イエスのことばを説明する必要性。**（「これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ注がれていなかったからである。」ヨハネ 7：39）

福音書の著者ヨハネは、語りの間に説明を追加しました。ここに、正しく理解してほしいというヨハネの配慮がうかがえます。イエスのことばを正しく解釈するには、その場面の背景だけでなく、もう少し広範囲に聖書の文脈を考慮する必要があります。イエスの招きの本当の意味は、イエスが天で栄光を受け、聖霊が送られるまでわかりませんでした。イエスは、聖霊について語っておられました。旧約聖書は、神の霊を受ける祝福について、またその霊が神の民のうちになす働きについて預言しますが、聖霊はまさにその預言の成就でした。いのちを与える水が豊かにあふれ出すというたとえば、聖霊が心の中に住まわれ働かれることを指します。

五旬節には、それが現実には起こりました。使徒 2 章にあるペテロの偉大な説教の中に説明されているとおりです。イエスは十字架にかけられ、死からよみがえりました。多くの人々によってよみがえった姿を目撃され、天に昇られました。これらのことはすべて必要なことでした。こうして、父なる神の右にあげられたイエスが「御父から約束された聖霊を受けて」、神の民に聖霊が注がれたのです。ペテロが話し終わると、多くの人が信じました。彼らは悔い改めて洗礼を受けるように促されただけでなく、聖霊の賜物を受けなさいと言われました。悔い改めてイエスを信じる人の内に与えられるこの聖霊こそ、イエスを信じるクリスチャンにとって、内側に湧く生ける水の源なのです。聖霊の賜物を与えてくださった神をたたえます。

今日何としてもお伝えしたいのは、イエスが私たちの信じるべきお方であり、このお方を信じる信仰によって聖霊を受けることです。このお方を信じる信仰によって、信じる者の人生に聖霊が生きて働かれる体験をするのです。イエスが生ける水の源であることに変わりはありません。人はイエスのもとに来て飲むときに、渴きを癒され、心に聖霊をいただきます。

（例：「神がともにおられる」という教えは、クリスマスに語られるテーマです。「神が私たちのために」というのは、あのすばらしいローマ 8 章のクライマックスです。ここヨハネ 7 章に描かれているのは、イエスが二階の大広間で弟子たちに教えられた真理、「神がうちにおられる」という教えです。ヨハネ 14：17）

私たちのうちにおられる神の御霊が、御霊の実である品性や行いを実らせてくれます。神の御霊が、私たちを愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制という生き方

に導いてくれます（ガラテヤ 5：22-23）。神の御霊が、素晴らしい主イエス・キリストを証する力を与えてくださいます。神の御霊が私たちの内に働き、私たちを作り変え、イエスに似た者としてくれます。神の御霊は真理の御霊です。私たちが主イエスの真理を理解して、従えるように助けてくださいます。

これらすべての祝福の源はイエスです。こうして私たちの霊の渇きは癒され、周りの人々の信仰を元気づけることができるようになります。

今日、あなたの霊は渇いていますか。あなたは周囲の人々の信仰を支え励ますことができるでしょうか。主が私たちにお望みなのは、豊かないのちです。主によって満たされる生き方です。（家族や親せき、近所の人たち、同僚や友人など）周囲の人々の祝福となる生き方です。

このみことばの真理が素晴らしいのは、渇きを癒す生ける水の源が一時的なものでないことです。年に一度のお祭りで終わりではありません。イエスは、決して枯れない水を与えようと言ってくださいます。聖霊は私たちの内に常に働いてくださいます。それは、私たち自身が、周囲の人にとって「いのちを与える」人になるためです。

素晴らしいと思いませんか。

これこそ、神が私たちに豊かないのちを与えるために成してくださった御業の真理です。

4. イエスのことで起こった分裂。（「そこで、群衆の間にイエスのことで分裂が起こった。」ヨハネ 7：43、40-44 節参照）

イエスはご自身について教え、奇跡を行い、人々を招きましたが、多くの人はその中でも信じなかったとヨハネの福音書は語ります。キリストがどういうお方で何とおっしゃったかについて、意見が分かれるのが常のようです。イエスのもとに来た人たちが、本当に求めていたものをイエスのうちに見出したことをヨハネがもっと強調していれば、この話はハッピーエンドだったでしょう。けれども実際はそうではありません。人々の間に混乱や分裂が起こり、イエスを受け入れようとしない人々がいた、というのが福音書の話の現実です。この個所でもそうですし、次につづく個所でもそうです（ヨハネ 7：45-52）。もちろん、信じていのちを受けた人もいます。その人たちは後にイエスが送ってくださった聖霊を受けたでしょう。けれども、多くの人はそのようではありませんでした。

同じことが今日にも言えることを覚えておきましょう。イエスがどういうお方かを知って応答し、約束のいのちを受け、内住の聖霊に満たされる体験をする人もいます。残念ながら、イエスのおっしゃることを拒む人、信じる決心をしない人もいます。その人たちは、イエスが望んでくださるいのちを受け入れません。

今朝ここに集う私たちとは、一線を画する人たちがいるかもしれません。イエスが神の御子であり救い主として受け入れ、神の御霊を受けたけれども、罪や自我のせいで聖霊とともに歩まず、聖霊を悲しませたり、聖霊の火を消したりしてしまった人たちです。その人たちは、いのちを与える水、いのちの川を身近に感じていません。御霊の賜物が十分発揮されていないからです。

立ち返るには、イエスが神であり主権者であられることを改めて認めなければなりません。イエス・キリストがどういうお方かを認め、「わたしのもとに来て飲みなさい」という主の招きにもう一度新たに応えましょう。そして主に心を開き、聖霊の働きを妨げるものを何もかも告白しましょう。「神の御霊をもう一度満たし、私の人生からあふれ出るようにしてください」と主に願い求めましょう。

(例：私は植物を育てるのが苦手です。オフィスに植物を置いています、たまに水やりを忘れて、申し訳なく思います。そんなとき、植物はしおれ、葉っぱは鉢の上になだれます。けれども、コップ一杯でも水をあげれば、目に見えて元気になります。植物が水を吸い込んで生き返り、うなだれていた葉っぱも元気を取り戻します。植物のあるべき姿に戻ります。)

私たちクリスチャンも、主にあっていきいきしているのが本来の姿です。聖霊が私たちを満たし、いつも豊かに生きる力を与えてくれるからです。

まとめ

宗教の教えやその他のあらゆるささやきが主の御声を聞こえにくくします。しかし、イエスの招きは今も変わらず人類に届けられなければなりません。イエスは今も、まことの霊のいのちを与える源であります。主をとおしてのみ、まことの霊のいのちを知ることができます。いのちを与える主の御霊が私たちのうちに住まわれ、満ちあふれる人生を導いてくださいます。皆さんにとってはいかがでしょう。イエスが私の渇きを癒してくださるお方だと確信をもって言えますか。

まず、イエスを主であり救い主として受け入れましたか。(ヨハネ 1 : 12)

すべてにおいて日々イエスに頼り、人生の必要をこのお方によって十分に満たしていただいていますか。

信仰が弱っていて、聖霊の満たしと力を求める必要がありますか。

残念ながら、この問いに対する答えも分かれるでしょう。しかし、信仰を持って「神の子キリスト」(ヨハネ 20 : 31) イエスに応答する人には、聖霊の内なる働きによって祝福された信仰生活は備えられています。イエスは今も、生ける水の源であり、豊かないのちの源であります。